【参考】　資料の訓読と注釈

一　亀田鵬斎筆　七言絶句「謝処士蔵月図」

扁舟西子　五湖を過ぎ
謝客西風　両鬢皤たり
一種の清江　明月に底る
君に憑りて試みに問わん　夜は如何と
無悶居士

▼この詩、中国・元時代の劉因（一二四九―一二九三）の『静修先生文集』に収める。書中「両西風」とあるのは、「西風両」とするのが正しい。

▼この書、「鵬斎先生壮年作」として、中島家に伝わる。

▼この書の引首印は、「善身堂」、落款印は「長興之記」「海東浪人」。

○扁舟―小さな舟。○西子―越王句踐が呉王夫差を惑わすために贈ったという女性。美女の代名詞とされる。○両鬢―左右の耳ぎわの髪。○明月―曇りのない、光輝く月。○無悶居士―鵬斎の別号として『胸中山』に収める。

二　亀田鵬斎筆　「新建久喜邊善館記」（拓本）

▼この文、詳細は『久喜市史　資料編Ⅲ　近世2』参照

三　亀田綾瀬筆　七言絶句

隴上の農歌　新月白く
澗邊の鳥乱　夕烟濃し
小楼好し対す　寒山寺
夢醒めし時　夜半の鐘を聴く
綾瀬漁人梓書

▼この詩、日本でも古くから「楓橋夜泊」の漢詩でなじみのある寒山寺を題材にしたものである。

▼この書の引首印は「学経」、落款印は「亀田長梓」「綾瀬漁人」。

○隴上―畑のそばの意。○新月―三日月。○寒山寺―江蘇省呉県（蘇州）の西、楓橋鎮にある寺。○夜半―よなか。○綾瀬漁人―亀田綾瀬の号。○梓―亀田綾瀬の字。長梓ともいう。

四　亀田鵬斎筆　「夫子賛」

照皇窟に隠れて六合汨没す。
思霊の洪猷、曜光掲ぐること有り。
嘻、夫子は思霊して、
詩書六藝、此においてか發す。
維れ其れ運度して、搰々として歇むこと罔し。
萬億年と雖も、以って我が日月を賛々せん。

関宿教授　亀田長呆沐手して拝書す

▼この詩、亀田鶯谷の『学孔堂遺文』下冊に収める。

▼この書の引首印は「学孔堂」、落款印は「保申之」「鵬雛■賓」。

○照皇―天照大神。○六合―宇宙の空間。○汨没―埋没する。○洪猷―大きなはかりごと。○詩書―『詩経』と『書経』。○六藝―貴族の子弟が学ぶべき六科目。礼、楽、射、御、書、数。○関宿教授―亀田鶯谷は、幕末に関宿藩の儒臣であった。○長呆―亀田鶯谷の字。呆ともいう。○沐手―手を洗う。

五　亀田鶯谷筆　扁額「演孔堂」

演孔堂
鶯谷亀田保書

▼中島撫山が、安政四年（一八五七）、両国矢ノ倉（現在の墨田区両国）に初めて開いた漢学塾の名前。

▼この扁額の引首印は「学孔堂」、落款印は「亀田保印」「申之」。

○演孔堂―孔子の教えを演繹（意味をおし広めて述べる）する場所という意。○保―亀田鶯谷の字。長保ともいう。

六　亀田鶯谷筆　扁額「幸魂教舎」

幸魂教舎

▼中島撫山が、明治六年（一八七三）、久喜本町（現在の久喜市本町六丁目）に開いた皇漢学の私塾の名前。日本の古典も教えていたので、「さきたまきょうしゃ」と読み習わされてもいる。

▼この扁額の引首印は「■■」、落款印は「長保之印」「鶯谷」。

○幸魂教舎―埼玉の地での教えの家という意。

七　中島撫山筆　二字書「駿聲」

駿聲

▼この書の引首印は「亦有期齋」、落款印は「撫山穉僊」「左知麻呂」。

○駿聲―天にまで達するような大きな声という意。

八　中島撫山筆　二字書「楽聖」

聖を楽しむ
七十七叟撫山慶

▼この書の引首印は「演孔堂」、落款印は「伯」

「章」「撫山」。
○聖―清酒のこと。○七十七叟―七十七歳の翁。

九　中島撫山筆　扁額「明倫館」

明倫館
中島慶麻呂

▼撫山の二男端蔵と江面の宮内翁助が、明治二十六年（一八九三）、江面村（現在の久喜市大字江面）の宝光院に開いた私立学校の名前。
▼中島撫山書の扁額「明倫館」は、書体を変えたものが、宮内翁助の家にも、もう一点伝えられている。
▼この扁額の引首印は「幸魂」、落款印は「さちまろ」「尾張連」。
○明倫館―五倫の道を明らかにする館という意。○慶麻呂―中島撫山の号の一つで、「さちまろ」と読む。

一〇　中島撫山筆　扁額「不為言揚」

言揚を為ず
八十一叟
慶作字

▼明治四十二年（一九〇九）、久喜新町の新宅に転居する際の作品と思われる。撫山葬儀後に一族で写した写真には、玄関の頭上に飾られていたことが確認できる。
▼この扁額の引首印は「■■」、落款印は「■■連」「さちまろ」。
▼この扁額は、従来「不磨否得（ふまいがい）」と読み習わされてきたが、今回、重野宏一氏の調査により、最後の二字を「言揚」と読むことが適切であることがわかった。ここに記して感謝の意を表す。
○言揚―和語で、ことばに出して相手にいうことの意。中島端蔵が設立した皇漢学専門私塾に「言揚学舎」があり、この名前は、その後の舎主竦之助にも引き継がれ、撫山が没すると、田人によって廃校の手続きがされた。
○八十一叟―八十一歳の翁。○作字―字を作る。

一一　中島撫山筆　『曾大家女誡』婦行章　一節

婦徳とは、必ずしも才明絶異ならざるなり。
婦言とは、必ずしも辯口利辞ならざるなり。
婦容とは、必ずしも顔色美麗ならざるなり。
婦功とは、必ずしも工巧過人ならざるなり。
清閑貞静にして、節を守り整斉、己を行うに恥有りて、動静に法有る、是れを婦徳と謂う。
辞を擇びて説き、悪語を道はず、時あって然

る後に言い、人に厭はれざる、是れを婦言と謂う。
塵穢を盥浣し、服飾鮮潔にして、沐浴時を以ってし、身垢辱せざる、是れを婦容と謂う。
紡績に専心し、戯笑を好まず、酒食を潔斎し、以って賓客に奉ず、是れを婦功と謂う。
此の四は、女人の大徳にして、之れを乏くすべからざるなり。
然れども之れを為すこと甚だ易く、唯だ心に存するに在るのみ。
古人言有り、「仁遠からんや、我れ仁を欲すれば、仁斯こに至る。」此の謂いなり。
右曹大家班姫の女誡婦行章の語。四行を發明するに尤も詳たり。蓋し、今撮りて録し、以って児婦の松子に示す。
明治庚戌春三月　八十二翁　慶

▼この一節、中国・後漢時代の班昭の『曹大家女誡』婦行第四に収める。
▼この書の引首印は「演孔堂」、落款印は「撫山穉僊」「日本厳儒」。
○才明絶異―才知聡明にして凡庸とはなはだ異なること。○辯口利辞―口が上手で言葉が流れるように出てくること。○顔色美麗―顔つきがあでやかで美しいこと。○工巧過人―手仕事が器用で人よりも優れていること。○清閑貞静―しとやかで静かなさま。○整斎―きちんと筋が通っているさま。○盥浣塵穢―よごれをきれいに洗い流すこと。○沐浴―髪や体を洗い清めること。○垢辱―恥辱。○戯笑―楽しげに笑う。○酒食―ごちそう。○賓客―来客。○古人有言―『論語』述而篇に収める。○曹大家班姫―中国・後漢の班昭のこと。班固の妹で、曹家に嫁いだので曹大家とも称される。○女誡婦行章―『曹大家女誡』の第四に収める。○児婦松子―撫山の七男比多吉の嫁まつのこと。中島家の当時の家風を伝えるものとして興味深い。○庚戌―明治四十三年（一九一〇）。○八十二翁―八十二歳の翁。

一二　中島竦之助筆　『曹大家女誡』婦行章

一節

女に四行有り。一に婦徳と曰い、二に婦言と曰い、三に婦容と曰い、四に婦功と曰う。
夫れ曰わく。
婦徳とは、必ずしも才明絶異ならざるなり。
婦言とは、必ずしも辯口利辞ならざるなり。
婦容とは、必ずしも顔色美麗ならざるなり。
婦功とは、必ずしも工巧過人ならざるなり。
清閑貞静にして、節を守り整斎、己を行うに恥有りて、動静に法有る、是れを婦徳と謂う。
辞を擇びて説き、悪語を道はず、時あって然る後に言い、人に厭はれざる、是れを婦言と謂う。
塵穢を盥浣し、服飾鮮潔にして、沐浴時を以ってし、身垢辱せざる、是れを婦容と謂う。

紡績に専心し、戯笑を好まず、酒食を潔斎し、以って賓客に奉ず、是れを婦功と謂う。
此の四は、女人の大徳にして、之れを乏くすべからざるなり。
然れども之れを為すこと甚だ易く、唯だ心に存するに在るのみ。
古人言有り、「仁遠からんや、我れ仁を欲すれば、仁斯こに至る。」此の謂いなり。
曹大家女誡の一節　七十四翁
中島竦録す

▼この書の注釈は、前項参照。
▼この書の引首印は「■■」、落款印は「竦印」「玉振道人」
○七十四翁―七十四歳の翁。

一三　宮島詠士章　七言絶句「焚書坑」

竹帛　煙銷えて　帝業虚し
関河　空しく鎖ざす　祖龍の居
坑灰いまだ冷ず　山東乱る
劉項は　元来　書を読まず
中島子の談を聴きて感有り。
古人の詩を録す　詠士

▼この詩、中国・唐時代の章碣の作品。
▼この書の落款印は「宮島彦印」「詠士」。
○竹帛―書物。○関河―函谷関と黄河。○祖龍―始皇帝。○劉項―劉邦と項羽。○中島子―之談―善隣書院に住みながら講義や研究を行っていた中島竦之助のことか。

一四　宮島詠士章　『管文正公日記』巻上

四字　一節

静中細思、古今億萬年、窮期有ることなからん。
人、其の中における寝處遊息、晝は僅かに一室のみ、夜は僅かに一榻のみ。
古人の書籍、近人の署述、浩きこと煙海のごとし。
人生目光の及ぶあたうところは、九牛の一毛に過ぎざるのみ。
事變萬端、美名百途。
人生才力の辨ずるあたうところは、太倉の一粒に過ぎざるのみ。
天の長なるを知り、而して吾が歴るところは短なり。
則ち憂患横逆の来に遇い、小忍に當りて以って其の定めを待たん。
地の大なるを知り、而して吾が居るところは小なり。
則ち榮利争奪の際を過ぎ、退譲に當りて以って其の雌を守らん。
書籍の多なるを知り、而して吾が見るところは寡なり。
則ち敢えて一得を以って自喜せず、而して思うに當り善を擇びて之れを約守せん。

事變の多なるを知り、而して吾が辨ずるところは少なり。
則ち敢えて功名を以って自矜せず、而して思うに當り賢を擧げて之れを共圖せん。
夫れ、是くの如きなれば則ち、是れより自満の見は、之れ蠲除に漸むべけんや。
曽文正公日記の一節を録す。
凡そ天下の事、公則ち成れば、私則ち敗る。
蓋し機を成して和平を生ずれば、兆敗れて嫌吝を生ぜん。
曽公の世、時尚お艱難にして、前代此くのごときはなし。
而して巨業を成す所以は、案ずるに其の虚己を以って人に為善を與うのみ。
是れ天下の大公なり。
在北の諸子、此れを以って胸に懸けんことを望む。
庶幾は、前賢の業を継がんと。
詠士　宮島大八誌す

▼この一節は、中国・清時代の曽国藩の『曽文正公日記』に収める。
▼この書は、日記と比べると、若干の文字の違いや、文脈上何節かの文を削ったりしている部分がある。
○窮期―終わるとき。○榻―幅が狭くて長く、やや丈の低い寝台。○煙海―数が多いことのたとえ。○目光―眼光。○九牛之一毛―ほんのわずか。○事變―突然に発生した普通でない出来事。○萬端―方法・事柄・形態などが多く、さまざまであること。○美名―いい評判。○才力―財力。○太倉―漢代以降、首都に置かれた国家の食料貯蔵庫。○退譲―へりくだって人にゆずる。○自矜―自分で自分の長所をほこる。○曽文正―曽国藩ともいう。書者宮島大八は張廉卿を師とし、その張廉卿の師が曽文正である。○虚己―私心・欲望を去って、人のいうことを聞き入れる。○自満―自己満足。○蠲除―免ずること。

一五　楊守敬筆　七字書「水侵臥柳払船底」

水は臥柳を侵して　船底を払う
宣統元年嘉平の月　楊守敬

▼この書、対聯の七言二句の作品であったものの一部と思われる。
▼この書の落款印は「楊守敬」「星吾七十以後書」。
○宣統元年―一九〇九年（明治四十二年）。○嘉平月―十二月。

一六　康有為筆　七字書「鵬擬九天須遠避」

鵬　九天を擬ぐ　すべからく遠避すべし
中島比多吉君
康有為

▼この詩、中国・唐時代の杜甫の詩（見王監兵馬使説近山有白黒二鷹羅者久取竟未能得王以為毛骨有異他鷹恐臘後春生騫飛避暖勁翮思秋之甚眇不可見請余賦詩二首）の中の一節。「遠避」は「卻避」とする場合もある。

▼この書の落款印は「有為康印」「維新百日出亡十六年三週大地遊遍四洲経三十一国行六十万里」。

○鵬礙九天―鵬の翼はあまりに大きすぎて天をも妨げる。「九天」とは、最も高い空の意。

○中島比多吉―撫山の七男。号は「謙皆」。明治末から昭和初めまで、日本人通訳者として、日本人・中国人双方からの信頼を得て、中国の地で活躍する。後に満州国皇帝となる溥儀の幼少時代から関係があり、溥儀や溥儀の周辺の人物から、よく名前が語られる。この展示で紹介した中国人の書は、すべてこの比多吉との関係によって収集したものと考えられる。

一七　恭親王溥偉筆　七言絶句「自嘲戯咏」

我が　志は　未だ曽て古人に譲らず
我が材は　豈に今人に如かざらんや
間来　天公に向いて問わんと欲す
何の故に　斯の無用の人を生みしかと

中島勿堂君の遺詩　庚午之夏録す
中島謙皆先生の雅命に応ず

▼この詩、中島端蔵の『斗南存稾』に収める。『斗南存稾』では「閑来」としているところを、この書では「間来」としている。

▼この書の落款印は「恭親王」「錫晋斎印」。

○古人―昔の人。○天公―天。○中島勿堂君―「勿堂」は中島端蔵の号の一つ。○庚午之夏―一九三〇年（昭和五年）。端蔵は、この年の六月十三日に没している。

一八　肅親王憲章筆　「蘭亭叙」　一節

是の日や、天朗かに氣清み、恵風和暢す。
仰いでは宇宙の大を觀、俯しては品類の盛んなるを察す。
目を遊ばしめ懐を騁する所以、以って視聴の娯を極むるに足れり。
信に楽しむべきなり。

先厳肅忠親王の遺墨を中島比多吉先生に撿贈す

肅親王憲章

▼この詩、中国・東晋時代の王羲之の「蘭亭叙」の中の一節。

▼この書の落款印は「肅親王」。

○恵風―おだやかな春の暖かい風。○和暢―のどかなさま。○品類―万物。○騁懐―心に思っていることをよく述べる。○先厳肅忠親王―亡父の愛新覚羅善耆（一八六六―一九二

二)。○撿贈―選んで贈る。

一九　愛新覚羅溥傑筆　五言対句

樹影　夏無きかと疑い
泉聲　半ば雲を破る
丁丑仲冬
中島先生　之れを正せ
溥傑繢し併せて題す

▼この書の落款印は「空山■■■」「溥傑■■」。
▼この画の落款印は「溥傑■■」。
○丁丑―一九三七年（昭和十二年）。○繢併題―絵を描き、文字も書き付けたの意。

二〇　羅振玉筆　『孟子』滕文公章句　下　一節

天下の廣居に居り、天下の正位に立ち、天下の大道を行う。
志を得れば民とともに之れに由り、志を得ざれば独り其の道を行う。
富貴も淫すること能わず、貧賤も移すこと能わず、威武も屈すること能わず。
此れを之れ大丈夫と謂う。
大同二年一月
中島先生の雅属　貞松　羅振玉

▼この詩、『孟子』滕文公章句下の一節に収める。
▼この書の落款印は「上虞羅振玉印」「歳寒得雪」。
○大同二年―一九三三年（昭和八年）。○貞松―羅振玉の号。

二一　中島端蔵筆　七言絶句「周瑜」

赤壁火光　百里紅なり
天下を三分して　東風に付す
閨中　更に双喬の喜ぶ有り
咲いて周郎を喚びて　阿郎と作す
右周瑜

▼この詩、中島端蔵の『斗南存稾』に収める。『斗南存稾』では「紅閨還」と詠じているところを、この書では「閨中更」としている。また、『斗南存稾』では「笑喚」と詠じているところを、この書では「咲喚」としている。さらに、『斗南存稾』では「阿翁」としているところを、この書では「阿郎」としている。書の末尾には「未定艸」と書かれているので、この後変更されたものであろう。
▼この書の落款印は「端」。
○赤壁火光―三国時代に赤壁で、魏軍の南下に対し、呉と蜀が連合し、呉将周瑜が曹操の軍船を焼き討ちにして大勝したことをいう。
○双喬―大喬・小喬の美人姉妹をいう。大喬

は呉王孫策の妃となり、小喬は呉将周瑜の妻となる。○咲―笑に通ず。○周郎―周瑜。

二三　伝　蘇軾筆　「書潁州祈雨詩」（複製）

元祐六年十月、潁州久旱す。
潁上に張龍公神の極めて霊異有るを聞く。
乃ち斎戒して男迨を遣わして、州學教授陳履常とともに往きて之れを禱らしむ。
迨も亦た頗る敬を信じ、沐浴斎居して往く。
明日、まさに龍骨至るを以ってすべし。
天色少變して、庶幾は雨雪を得んと。
廿六日　軾書す。
廿八日、景貺・履常と同じく二欧陽を訪ね、詩を作りて云う。
「後夜、龍、雨を作し
天明、雪、渠を填む
夢回って、剥啄を聞く
誰か、趙、陳、予」
景貺、拊掌して曰く。「句法甚だ新なり。前人未だ此の法有らず。」
季默曰く。「之れ有り。「長官請客吏請客、目曰主簿少府我。」即ち此の法なり。」
相ともに笑いて語り、三更に至りて帰る。
時に星斗粲然、枕に就いて未だ幾くならずして、雨已に簷を鳴らす。
朔旦日に至りて雪と作る。
五人は復た郡斎に會う。
既に歎じて龍公の威徳を仰ぎ、復た詩語の不謬を嘉みす。
季默、之れを書せんと欲し、以為へらく異日一笑す。
是の日、景貺、迨に詩を出して云う。
「吾が儕　歸臥して、髀肉裂け
會々壷を携えること有りて
行役に労す」
僕笑いて曰く。「是れ児なり。勇を好むこと我を過ぎたり。」

▼この詩、『蘇軾文集』巻六十八に収める。
▼この書、蘇東坡「書潁州祈雨書」として、中島家に伝わる。吉井和夫氏のご指摘によると、この書は、コロタイプ版の影印で刊行されたものであるらしく、また真跡の所在はわからなくなっているものの、中国では「祷雨帖」として紹介されていることなどがわかった。ここに記して感謝の意を表す。
▼この書の落款印は「東坡居士」「趙郡蘇氏」。
○元祐六年―一〇九一年（寛治五年）。○張龍公神―「張龍公」は、諱は路斯、もと潁上の人で、死後、龍になったという言い伝えがあり、それを潁人が祀り、久旱には雨を祷る例になっていた。○斎戒―祭祀の前に紙や身を洗い、衣服を改め、心身を清らかにすること。○陳履常―名は師道。履常は字。○沐浴斎居―「斎戒」と同じ意。○軾―蘇軾の名。字は東坡。○景貺―趙承議の字。名は令畤。○二欧陽―欧陽叔弼・欧陽季默の二人の兄弟のこ

とで、ともに欧陽修の子。○「後夜龍作雨～誰乎趙陳余」―この部分、『蘇東坡詩集』巻三十四に収める詩（與趙陳同過欧陽叔弼新治小齋戲作）の中の一節。○後夜―夜中から朝にかけてをいう。○天明―明け方。○剥啄―足音。○拊掌―ぽんと手をうって喜ぶさま。○三更―午後十一時から午前一時までの時間。○星斗―星。○粲然―あざやかで、くっきりと美しい。○朔旦日―陰暦ついたちの朝の日。○郡齋―郡の役所。○異日―後日。○儕―なかま。○帰臥―官職を辞して、郷里に帰る。○髀肉裂―ふとももが裂けること。平穏な生活の中で実力を発揮し功名を立てる機会がないまま無為に過ごすこと。○行役―徴発されて遠くへ行き、土木工事や守備に当たる。

【参考文献（順不同）】

- **平成十年度特別展図録『江戸の文人交遊録』（世田谷区立郷土資料館）**
- **岩坪充雄著『江戸・唐様書道史研究叢稿Ⅰ』（菁柯桑工房）**
- **杉村英治著『亀田鵬斎』（三樹書房）**
- **岡村治編著『亀田鵬斎総集』（小千谷市鵬斎展実行委員会）**
- **渥美国泰著『亀田鵬斎と江戸化政期の文人達』（㈱芸術新聞社）**
- **米田弼太郎著『近世書人の表現と精神』所収「亀田鵬斎の書とその門流」（柳原書店）**
- **山内孝卿『教育心印』**
- **石川九楊編『書の宇宙』十四「文人の書北宋三大家」（㈱二玄社）**
- **石川九楊編『書の宇宙』二十四「書の近代の可能性」（㈱二玄社）**
- **相川政行・藤木正次監修『書の手帖』（㈱小学館）**
- **『書論』第二十三号「特集吉島詠士」（書論研究会）**
- **村山吉廣著『書を学ぶ人のための漢詩漢文入門』（㈱二玄社）**
- **近藤春雄編『中国学芸大事典』（㈱大修館書店）**
- **中村伸夫著『中国近代の書人たち』（㈱二玄社）**
- **呉玉璣編『中国書画家落款辞典』（㈱東京堂出版）**
- **村山吉廣編『中島操山小伝』（鶴岡市教育委員会）**
- **村山吉廣著『評伝・中島敦』（中央公論新社）**
- **呂山太刀掛重男著『風雅愛書漢詩の手本』第二輯所収「中島斗南」（漢詩書刊行会）**
- **愛新覚羅溥傑著『溥傑自伝』（河出書房新社）**
- **川島尚子著『望郷』（㈱集英社）**
- **魚住和晃編著『マンガ　書の歴史　殷～唐』（㈱講談社）**
- **魚住和晃編著『マンガ　書の歴史　宋～民国』（㈱講談社）**
- **魚住和晃編著『マンガ　「日本」書の歴**

史』（㈱講談社）

・魚住和晃著『宮島餓土』（㈱二玄社）

ほか

【ご協力者（順不同）】

（括弧内の算用数字は、

ご指摘をいただいた資料№）

・池澤一郎氏（３、２１の翻字）

・大越雅子氏（３の翻字）

・重野宏一氏（１０の翻字）

・武田庸二郎氏（１、３、１１，１２、１３、１５、１６の翻字）

・中村和夫氏（１０の翻字）

・林貴史氏（４、２０の落款印）

・村山吉廣氏（資料全般の訓読等）

・吉井和夫氏（２２の概整）